現役世代の分断をめぐる一考察*[1]

吉川　徹
（大阪大学）

【論文要旨】

分析対象は、調査時点で 20～59 歳の男女(2015 年調査の母集団人口 6,025 万人、有効回答数 n=4,620)とする。これは就労、結婚、出産、養育、教育投資、ワークライフバランスなどの当事者である、いわゆる現役世代に注目することを意味している。そして性別(男/女)、年齢(若年/壮年)、学歴分断線(非大卒/大卒)という 3 本の分断線を用い、この現役世代の対象者を 8 つの社会集団に分ける。そのうえで社会的属性の異なりを示し、社会意識や社会的活動の分断状況を検討する。本研究においては、いくつかの記述的な実態を示すことで、現代日本社会の分断状況を描き出す、このシンプルな分析枠組みの有効性を論じたい。

キーワード：分断社会、現役世代、大卒／非大卒

１．現役世代への注目

SSM2015 のサンプル設計上の特徴の第一は、計画標本数の多さである。有効回収数 7,817 票、有効回収率は 50.1%というサイズは、国内最大規模の学術社会調査であり、SSM 時系列調査の歴史のなかでも最大の設計である。第二の特徴は、従来の対象者層に加え、新たに 70～79 歳の対象者が計画サンプルに加えられたということである。

日本の階層調査研究は、戦後の産業化の趨勢を、エビデンスをもって描き出すことを目的として始められた。それゆえに質問項目は個人と産業セクターの接点にある職業項目、経済要因項目中心の構成となっている。しかも当初の調査対象者は、1950 年代に産業セクターの担い手と想定されていた男性に限られていた。1985 年以降は女性対象者が加わっているが、SSM2005 までの 6 度の調査回においては、いずれも調査対象者は 20～69 歳の男女であった。

SSM2015 においては、これが 10 生年拡張されている。そのため高齢期を迎えた 1935～44 生年層を、過去の SSM 調査から継続して捉えることが可能になっている。なぜ SSM 調査はこのコーホートにこのように強い関心を示しているのかを振り返ってみよう。かれらは、社会調査データにおける最大ボリューム層として、これまでの SSM 調査において「主役」を演じてきた。SSM1975 には、高度経済成長の只中で、学校を卒業して社会に出て間もない 20～30 代のかれらの姿が捉えられている。当時注目された分析結果のひとつが地位の非一貫性である(原・今田 1979)。これは、クラスター分析により、学歴が高卒以上で、職業的地位は

[1] 本研究は、JSPS 科研費 JP25000001 の助成を受けたものです。

比較的高いが、収入はまだそれほど高くない人びとのクラスターが、社会の中間あたりで大きな比率を占めていることが明らかにした研究である。いうまでもなく、それは高度経済成長直後のこのコーホートの姿であった。バブル経済前夜に実施された SSM1985 では、日本的雇用慣行のなかで職業キャリアを順調に進行させ、結婚、出産、子育てという人生の過程を歩んでいく 30～40 代男女としてのかれらの姿が、現役世代の中核として捉えられている。

続く SSM1995、SSM2005 では、40 歳を過ぎ壮年期に至ったかれらの地位達成と、次世代再生産が描き出された。佐藤俊樹(2000)は、その著書『不平等社会日本』において、この年齢に至った人びとの世代間関係の時代変化を分析して大きな注目を集めたが、その結論は、戦後日本社会では一時は平等化が進んだが、おおよそこのコーホート(佐藤のいう「団塊世代」)を転機として、不平等化が進行しつつあるということであった。

つまり、日本の調査計量社会学は、このコーホートのライフコースを、20 世紀後半の時代の流れに重ね合わせながら分析してきたのである。それゆえに SSM2015 では、大きな人口ボリュームを保ったまま高齢期を迎えたかれらの経済的基盤や資産、生活実態が焦点の一つとされているのだ。この継続の重要性はいうまでもない。

だが、長い前置きになってしまったが、本稿ではこの目玉世代をあえて分析対象から外すことで、この先の日本社会の動向に焦点を絞るという分析方針をとる。これは、SSM 階層調査研究の本来の「哲学」である、現役世代の産業社会における位置づけをみる視座にとどまって考えようということだといえる。

この視点でみるとき、今回の SSM2015 のもうひとつの特徴は、これまでの SSM 継続調査では明らかにすることができなかった、最新の若年層の動向を知ることができるという点にある。10 年前の SSM2005 では、このとき 20 代であった 1975～1984 生年世代については、十分な回収数を得ることができなかったため、数値にやや不安定な動きがみられた。しかし SSM2015 では、計画標本の大きさと若年層の回収率の高さによって、その年齢層はもとより、さらにその下の 1985～1994 生年世代までの実態を把握することが可能になっている。

そこで本研究では、SSM2015 の全対象者から、確実に退職年齢に至らない若年・壮年の 20 歳～59 歳までのサンプル、すなわち 20～50 代の男女に絞り、これを現役世代とみて、その動向を分析する。生年でいえば 1955(昭和 30)年生まれから、1994(平成 6)年生まれの 40 生年コーホートの幅にあたる。その人口規模は約 6,025 万人で、日本の総人口 1 億 2,700 万人のほぼ半数(47.4%) に相当する。残りの約半数の内訳は、未成年がおよそ 2,200 万人、60 歳以上が約 4,000 万人なので、日本社会を年齢の若い順に 2:5:3 の比率で分けたときの、真ん中のコーホートにあたる。SSM2015 のデータでは、この現役世代の有効ケース数は 4,668 ケースとなる。

この分析指針は、団塊の世代の退出後を考えるものであり、同時に昨今の若者論の対象となる世代に目を向けるものでもある。この先の日本社会を担っていくこの人びとを、本稿で

は現役世代と呼ぶことにする。この現役世代は、産業経済セクターから退いた団塊の世代に代わって、勤労と納税の義務を果たしている。利便性を増している宅配物流業務や飲食店や、コンビニエンス・ストアの長時間の営業サービスなどの実働に携わり、ITC などの技術革新を日進月歩で進め、国際展開する日系企業を動かしているのも、ほとんどが現役世代の力だといってもいいだろう。つまり、この人びとの日々のはたらきの集積が、GDP などで示される日本の産業経済部門の実質的な駆動力となり、超高齢社会日本の福祉制度を運用可能なものにし、出産育児や学校教育を公的にサポートするための税制上の基盤になっているのだ。

しかも、一人ひとりをみると、大半の人には、さまざまな健康状態と経済状態の、自分自身の父母や祖父母たちがいる。同居や近居をしている場合も、離れて暮らしている場合もあるだろうが、現在あるいは近い将来における独居高齢者や高齢者介護の問題について、当事者としてケアのあり方を考えていかなければならないのもこの現役世代だ。

他方で、3 人に 2 人以上が自分自身の子どもをもっていて、かれらを育て、次の社会に送り出す義務と責任を負っている。加えて、多くの男女が、夫や妻という生活のパートナーとの間の役割分担を考えつつ、家事や育児を実践しているので、ワークライフバランスを考える当事者だともいえる。

要するに、日本の経済成長を持続・拡大させるのも、働きぶりに応じて所得税を負担するのも、超高齢社会の課題に直面しているのも、近未来の人口減少を食い止める役割が期待されているのも、世界一高いといわれる大学学費について親として負担を強いられるのも、男女共同参画や一億総活躍の実践を督励されているのも、すべてこの現役世代の人びとだといっても、あながち過言ではないのだ。

２．アイデンティ・セグメンテーション: プラチナ８

本稿ではこの現役世代を分析するための枠組みを考え、提案したい。基本的なアイデアはきわめて単純であり、新たな枠組みと呼べるほどのものでもない。ここで目指すのは、人生が経過しても変動しない、諸個人のアイデンティティを基準として、分析対象者をセグメント化しようという考え方である。生年、性別、学歴は人生の経過に伴って変化することはほとんどない。学歴についてはリカレント教育の可能性を考えるべきだという見方もありうるが、SSM2015 においては、事実上その数はほとんどない。

ここで、人生が経過しても変化しない個人のアイデンティティと呼んでいるものは、パネルデータ分析における固定効果要因にあたるものだと考えればわかりやすいだろう。今、変更不可能な個人のアイデンティティに基づく不平等が問題になっている。これは民主主義社会の根幹にある問題だといえる。このことを考えようとするとき、固定効果要因がもつ影響力をみることは意義のあることであるだろう。

分析操作を簡単に説明していく。本稿では、現役世代について生年を調査年において 20〜

30 代であった若年層と、40～50 代であった壮年層に二分することとした。さらに学歴については高等教育進学の有無で二分し、大卒層と非大卒層と呼ぶこととする。この分け方では、専門学校進学は非大卒層となり、短大、高専の前期高等教育は大卒層となる。大卒層には高等教育中退も含まれている。それぞれの比率は以下のとおりとなる。

表 1　生年の分布

	度数	パーセント
若年層	1,933	41.4
壮年層	2,735	58.6
合計	4,668	100

表 2　学歴の分布

	度数	パーセント
非大卒	2,664	57.1
大卒	2,004	42.9
合計	4,668	100

表 3　性別の分布

	度数	パーセント
男性	2,070	44.3
女性	2,598	55.7
合計	4,668	100

SSM2015 においては、サンプリングのベースとなっている性別・生年はもちろん、この世代では学歴の回答にも幸いなことに項目欠損がない。よってこれらの変数を分析に投入しても、有効回答数が減ることはなく 4,668 ケースが保たれることになる。これもこれらの要因を分析に用いることの好都合な点である。

現代日本社会の現役世代においては、これら 3 変数の間には強い従属関係はない。このことに着目して、性別　(男/女)，年齢　(若年/壮年)，学歴分断線　(非大卒/大卒)という 3 本の分断線を組み合わせ、現役世代を 8 つのセグメント(類型)に分ける。以下ではそれぞれを若年非大卒男性、若年非大卒女性、若年大卒男性、若年大卒女性、壮年非大卒男性、壮年非大卒女性、壮年大卒男性、壮年大卒女性と呼ぶことにする。

表 4　現役世代の 8 セグメント分割

	度数	パーセント
若年非大卒男性	449	9.6
若年非大卒女性	556	11.9
若年大卒男性	418	9.0
若年大卒女性	510	10.9
壮年非大卒男性	714	15.3
壮年非大卒女性	945	20.2
壮年大卒男性	489	10.5
壮年大卒女性	587	12.6
合計	4,668	100

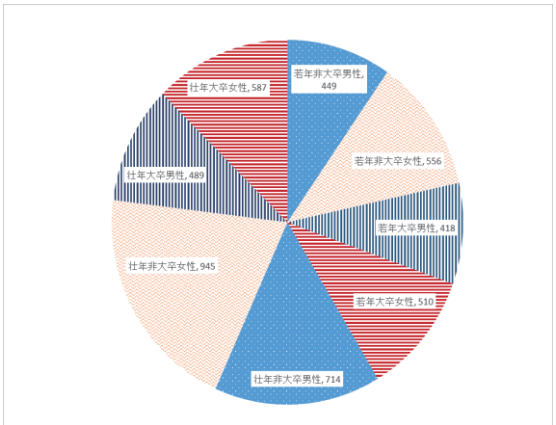

図 1　8 セグメントの構成比率

現役世代を構成する 8 つのセグメントをグラフで表すと、図 1 のようになる。この生年世代はポスト高学歴化期にあたるため、表 3 でみたとおり、大卒/非大卒フィフティ・フィフティの学歴分断に近い状態が成立している(吉川 2009)。そのためほぼ一次独立の、これらの 3 要因によって 8 つのセグメントを分割したとき、相対比率はいずれもほぼ 9～20%となり、円グラフからもわかるとおり、著しいケースの偏りはみられない。また SSM2015 では最小のセグメントである若年大卒男性でも 418 ケースを確保できており、分析結果を信頼することができる。

表４　母集団における 8 セグメントの比率

	度数	パーセント
若年非大卒男性	676万人	11.2
若年非大卒女性	652万人	10.8
若年大卒男性	711万人	11.8
若年大卒女性	682万人	11.3
壮年非大卒男性	1011万人	16.8
壮年非大卒女性	1062万人	17.6
壮年大卒男性	649万人	10.8
壮年大卒女性	582万人	9.7
合計	6025万人	100

なお、この 8 セグメント区分については、国勢調査と学校基本調査を用いることで、母集団の実数を計算することができる。その結果が以下である。これと照合すると、SSM2015 では、回収率の偏りの影響で壮年非大卒女性の比率がやや高くなっているが、それでも偏りは重大ではないと判断したい。

この分類は 2 値のカテゴリ変数を、3 重に組み合わせたものであるため、計量操作上も便利な特性をもつ。こうした 3 変数の交絡の関係をみる場合、3 つの主効果と 3 つの 2 次交互作用と 1 つの 3 次交互作用を許容する自由度 7 をもつことになるが、これを 8 カテゴリの変数としてみる場合も、やはり自由度は 7 であり情報量が同等になる。つまり 3 変数の交絡を考慮した因果モデルと、このカテゴリ変数は、ただ指標の効果の意味が異なるだけで、まったく同じ因果的説明力をもっているのだ。ここでは紙幅の関係で結果は示さないが、たとえばこの変数をカテゴリカル・ダミー変数として、回帰分析や一般線形モデルの独立変数に入れれば、3 つのアイデンティティの主効果と交互作用効果を全て投入したのと同じことになる。加えていえば、上述したとおり欠損値も少ない。そこで以下では、このジェンダー、コーホート、学歴を総合的にみる、8 カテゴリのアイデンティティ・セグメンテーション変数を、プラチナ８と呼ぶことにする。　吉川(2018)では、このプラチナ 8 を用いて SSM2015 データの基礎分析を行い、日本社会の分断を論じている。本稿は、そこで示すことができなかった、細かな数値、検定結果や因果的説明力を紹介するものである。

３．プラチナ８と社会的属性の関係

3.1　SES 変数

まずプラチナ 8 と個人収入の関係をみよう(表 5)。この結果からは、壮年大卒男性の世帯収入が約 660 万円であるのに対して、同じ男性でも若年非大卒男性では半分以下の約 322 万円にとどまっており、若年女性ではわずか約 140 万円であることがわかる。現役世代内には 4 倍以上の稼得力の格差があるということになる。

続いて表 6 から世帯収入の格差をみると、ここでは壮年大卒男性が最高額で約 887 万円であるのに対し、若年非大卒男性では約 500 万円となっており、世代と学歴の組み合わせによって大きな分断が生じている状況をみることができる。

表 5　セグメント別個人収入

従属変数:　個人収入(実数)			
	平均	標準 偏差	度数
若年非大卒男性	322.04	173.45	423
若年非大卒女性	140.24	137.11	535
若年大卒男性	378.42	262.35	406
若年大卒女性	179.48	173.80	488
壮年非大卒男性	466.57	299.70	660
壮年非大卒女性	152.53	163.81	888
壮年大卒男性	659.39	385.73	449
壮年大卒女性	222.12	254.25	558
合計	298.59	291.12	4,407
Sig. F<=.01, R2 乗 = .328 (調整済み R2 乗 = .327)			

表 6　セグメント別世帯収入

従属変数:　世帯収入(実数)			
	平均	標準 偏差	度数
若年非大卒男性	500.82	246.23	264
若年非大卒女性	514.62	311.45	375
若年大卒男性	651.97	371.95	301
若年大卒女性	683.84	455.77	309
壮年非大卒男性	650.05	386.66	552
壮年非大卒女性	606.57	350.21	690
壮年大卒男性	886.85	469.42	400
壮年大卒女性	854.18	534.45	435
合計	672.41	421.17	3,326
Sig. F<=.01, R2 乗 = .090 (調整済み R2 乗 = .088)			

続いて職業をみる。表 7 は従業上の地位をみたもので、表 8 は職業分類をみたものである。当然ながらプラチナ 8 と職業変数の間には大きな関連性がみられる。おおまかにいえば、大卒層がホワイトカラー職に従事し、非大卒層がブルーカラー職に従事する傾向があり、管理職は壮年男性に多く、女性ではパート・アルバイト、派遣社員、契約社員、食卓、臨時雇用などの非正規従業者が多いなどの傾向がみられるのだ。

さらに表 9 では、有職者に限って、現在就いている仕事の職業威信スコア(95 年スコア)のセグメント平均を算出している。ここには示さないが、16 年スコアを用いてもこれとほとんど同じ結果となる。表 9 をみると、壮年大卒男性の職業威信スコアが最も高く、若年非大卒男性の職業威信スコアが最も低いことがわかる。ここにも仕事をめぐって、現役世代内に分断状況があることを指摘できる。

表 7　セグメント別従業上の地位

	経営者、役員	常時雇用されている一般従業者	パート・アルバイト	派遣社員	契約社員、嘱託	臨時雇用	自営業主、自由業者	家族従業者	内職	無職：仕事を探している	無職：仕事を探していない	学生	合計
若年非大卒男性	10	299	27	13	21	1	29	23	0	13	8	4	448
	2.20%	66.70%	6.00%	2.90%	4.70%	0.20%	6.50%	5.10%	0.00%	2.90%	1.80%	0.90%	100.00%
若年非大卒女性	3	173	163	9	16	7	11	13	3	35	116	6	555
	0.50%	31.20%	29.40%	1.60%	2.90%	1.30%	2.00%	2.30%	0.50%	6.30%	20.90%	1.10%	100.00%
若年大卒男性	5	286	16	3	9	5	16	11	0	8	1	58	418
	1.20%	68.40%	3.80%	0.70%	2.20%	1.20%	3.80%	2.60%	0.00%	1.90%	0.20%	13.90%	100.00%
若年大卒女性	1	207	62	15	23	9	14	6	0	23	87	63	510
	0.20%	40.60%	12.20%	2.90%	4.50%	1.80%	2.70%	1.20%	0.00%	4.50%	17.10%	12.40%	100.00%
壮年非大卒男性	41	485	22	9	19	4	85	7	0	18	24	0	714
	5.70%	67.90%	3.10%	1.30%	2.70%	0.60%	11.90%	1.00%	0.00%	2.50%	3.40%	0.00%	100.00%
壮年非大卒女性	22	235	329	16	31	9	23	41	7	37	194	0	944
	2.30%	24.90%	34.90%	1.70%	3.30%	1.00%	2.40%	4.30%	0.70%	3.90%	20.60%	0.00%	100.00%
壮年大卒男性	44	346	10	3	12	1	56	4	0	7	6	0	489
	9.00%	70.80%	2.00%	0.60%	2.50%	0.20%	11.50%	0.80%	0.00%	1.40%	1.20%	0.00%	100.00%
壮年大卒女性	18	178	153	13	30	9	25	27	3	15	113	2	586
	3.10%	30.40%	26.10%	2.20%	5.10%	1.50%	4.30%	4.60%	0.50%	2.60%	19.30%	0.30%	100.00%
合計	144	2209	782	81	161	45	259	132	13	156	549	133	4664
	3.10%	47.40%	16.80%	1.70%	3.50%	1.00%	5.60%	2.80%	0.30%	3.30%	11.80%	2.90%	100.00%

Chi-sq =1956.973, d.f.=77 Sig.<.01. Cramer'V=.245.

表 8　セグメント別 SSM 職業分類(+無職)

	専門	管理	事務	販売	熟練	半熟練	非熟練	農業	無職	合計
若年非大卒男性	34	3	54	40	144	84	37	11	26	433
	7.90%	0.70%	12.50%	9.20%	33.30%	19.40%	8.50%	2.50%	6.00%	100.00%
若年非大卒女性	72	0	102	82	41	43	18	5	157	520
	13.80%	0.00%	19.60%	15.80%	7.90%	8.30%	3.50%	1.00%	30.20%	100.00%
若年大卒男性	128	5	80	60	31	23	14	5	67	413
	31.00%	1.20%	19.40%	14.50%	7.50%	5.60%	3.40%	1.20%	16.20%	100.00%
若年大卒女性	123	0	135	37	8	10	8	4	173	498
	24.70%	0.00%	27.10%	7.40%	1.60%	2.00%	1.60%	0.80%	34.70%	100.00%
壮年非大卒男性	49	29	103	78	204	123	56	23	42	707
	6.90%	4.10%	14.60%	11.00%	28.90%	17.40%	7.90%	3.30%	5.90%	100.00%
壮年非大卒女性	105	4	198	104	83	94	43	19	234	884
	11.90%	0.50%	22.40%	11.80%	9.40%	10.60%	4.90%	2.10%	26.50%	100.00%
壮年大卒男性	147	53	122	68	39	14	15	11	14	483
	30.40%	11.00%	25.30%	14.10%	8.10%	2.90%	3.10%	2.30%	2.90%	100.00%
壮年大卒女性	137	4	181	50	21	13	19	4	130	559
	24.50%	0.70%	32.40%	8.90%	3.80%	2.30%	3.40%	0.70%	23.30%	100.00%
合計	795	98	975	519	571	404	210	82	843	4497
	17.70%	2.20%	21.70%	11.50%	12.70%	9.00%	4.70%	1.80%	18.70%	100.00%

Chi-sq =1505.333, d.f.=56 Sig.<.01. Cramer'V=.219.

表 9　セグメント別有職者職業威信(95 年)スコア

従属変数:　職業威信スコア （95年スコア）

	平均	標準 偏差	度数
若年非大卒男性	48.57	6.40	407
若年非大卒女性	49.11	7.14	363
若年大卒男性	55.28	10.50	346
若年大卒女性	53.94	8.58	325
壮年非大卒男性	49.58	6.90	665
壮年非大卒女性	49.07	6.90	650
壮年大卒男性	57.06	10.87	469
壮年大卒女性	53.10	8.36	429
合計	51.63	8.74	3,654

Sig. F<=.01, R2 乗 = .123 (調整済み R2 乗 = .121)

続いて家族構成をみていこう。表 10 は各セグメントの対象者の子ども数をみたものである。若年層では子ども数 0 人か 1 人というケースが多く、少子化傾向が確認できる。とくに若年大卒男性、若年大卒女性の子ども数が少ない傾向がみられる。ただし、若年非大卒女性では 65%が子どもをもっており、しかも最頻値は 2 人である。彼女たちが少子化に抗う重要な貢献をしていることがうかがえる。

表 10　セグメント別子ども数

	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	合計
若年非大卒男性	218	62	80	33	12	2	1	0	408
	53.40%	15.20%	19.60%	8.10%	2.90%	0.50%	0.20%	0.00%	100.00%
若年非大卒女性	186	103	153	73	13	2	1	0	531
	35.00%	19.40%	28.80%	13.70%	2.40%	0.40%	0.20%	0.00%	100.00%
若年大卒男性	241	51	79	23	3	1	0	0	398
	60.60%	12.80%	19.80%	5.80%	0.80%	0.30%	0.00%	0.00%	100.00%
若年大卒女性	274	76	107	30	2	0	1	0	490
	55.90%	15.50%	21.80%	6.10%	0.40%	0.00%	0.20%	0.00%	100.00%
壮年非大卒男性	182	86	249	132	19	6	2	0	676
	26.90%	12.70%	36.80%	19.50%	2.80%	0.90%	0.30%	0.00%	100.00%
壮年非大卒女性	133	144	380	206	43	7	0	1	914
	14.60%	15.80%	41.60%	22.50%	4.70%	0.80%	0.00%	0.10%	100.00%
壮年大卒男性	109	72	186	92	10	2	0	0	471
	23.10%	15.30%	39.50%	19.50%	2.10%	0.40%	0.00%	0.00%	100.00%
壮年大卒女性	98	102	250	101	16	1	1	0	569
	17.20%	17.90%	43.90%	17.80%	2.80%	0.20%	0.20%	0.00%	100.00%
合計	1441	696	1484	690	118	21	6	1	4457
	32.30%	15.60%	33.30%	15.50%	2.60%	0.50%	0.10%	0.00%	100.00%

Chi-sq =670.746, d.f.=49 Sig.<.01. Cramer'V=.147.

表 11 は各セグメントの対象者の父親学歴を、義務教育、高卒相当、大卒相当の 3 分類でみたものである。これをみると、父親世代の教育拡大の度合いの違いのため、若年層と壮年層では父親学歴の分布が異なっている。しかしいずれにても、大卒層では父親大卒の比率が高く、非大卒層では、義務教育、高卒相当の比率が高いという明確な傾向がある。親学歴の男女の違いは大きくない。

表 11　セグメント別父親学歴

	義務教育	高卒相当	大卒相当	合計
若年非大卒男性	88	204	64	356
	24.70%	57.30%	18.00%	100.00%
若年非大卒女性	99	289	81	469
	21.10%	61.60%	17.30%	100.00%
若年大卒男性	26	162	210	398
	6.50%	40.70%	52.80%	100.00%
若年大卒女性	29	209	246	484
	6.00%	43.20%	50.80%	100.00%
壮年非大卒男性	290	249	33	572
	50.70%	43.50%	5.80%	100.00%
壮年非大卒女性	382	306	79	767
	49.80%	39.90%	10.30%	100.00%
壮年大卒男性	102	208	145	455
	22.40%	45.70%	31.90%	100.00%
壮年大卒女性	106	242	182	530
	20.00%	45.70%	34.30%	100.00%
合計	1122	1869	1040	4031
	27.80%	46.40%	25.80%	100.00%

Chi-sq =891.360, d.f.=14 Sig.<.01. Cramer'V=.333.

表 12 は各セグメントの対象者の既婚者の配偶状況をみたものである。これをみると、当然ながら 30 代以下の若年層では未婚者が多く、40 代以上の壮年層では有配偶の比率が高い。ただし若年層のなかで、若年非大卒女性だけは、既婚の比率が高い傾向にある。

表 13 は各セグメントの既婚者の配偶者学歴をみたものである。これをみると、夫婦の学歴

には強い関連性があり、細かく見ていくと、どのセグメントでも学歴同類婚傾向が強いことがわかる(筒井 2016)。大卒/非大卒境界を基準にして、夫婦の学歴同質性をみると、この世代では約 78%の夫婦が同学歴であることがわかる(吉川 2018)。

表 12　セグメント別配偶状況

	未婚	有配偶	離別	死別	合計
若年非大卒男性	218	216	14	1	449
	48.60%	48.10%	3.10%	0.20%	100.00%
若年非大卒女性	170	346	38	2	556
	30.60%	62.20%	6.80%	0.40%	100.00%
若年大卒男性	230	185	2	0	417
	55.20%	44.40%	0.50%	0.00%	100.00%
若年大卒女性	233	262	15	0	510
	45.70%	51.40%	2.90%	0.00%	100.00%
壮年非大卒男性	144	511	55	4	714
	20.20%	71.60%	7.70%	0.60%	100.00%
壮年非大卒女性	65	757	94	29	945
	6.90%	80.10%	9.90%	3.10%	100.00%
壮年大卒男性	72	397	17	2	488
	14.80%	81.40%	3.50%	0.40%	100.00%
壮年大卒女性	61	483	31	12	587
	10.40%	82.30%	5.30%	2.00%	100.00%
合計	1193	3157	266	50	4666
	25.60%	67.70%	5.70%	1.10%	100.00%
Chi-sq =802.793, d.f.=21 Sig.<.01. Cramer'V=.240.					

表 13　セグメント別配偶者学歴

	中学校	高校	専修学校（高等課程、専門課程）	短大（短期大学）	高専（高等専門学校）	大学	大学院	その他	わからない	
若年非大卒男性	10	88	51	44	4	17	1	0	1	216
	4.60%	40.70%	23.60%	20.40%	1.90%	7.90%	0.50%	0.00%	0.50%	100.00%
若年非大卒女性	29	147	66	10	8	73	10	0	2	345
	8.40%	42.60%	19.10%	2.90%	2.30%	21.20%	2.90%	0.00%	0.60%	100.00%
若年大卒男性	2	24	43	37	2	66	10	0	1	185
	1.10%	13.00%	23.20%	20.00%	1.10%	35.70%	5.40%	0.00%	0.50%	100.00%
若年大卒女性	2	45	35	3	5	143	27	0	1	261
	0.80%	17.20%	13.40%	1.10%	1.90%	54.80%	10.30%	0.00%	0.40%	100.00%
壮年非大卒男性	13	303	81	83	1	27	0	0	2	510
	2.50%	59.40%	15.90%	16.30%	0.20%	5.30%	0.00%	0.00%	0.40%	100.00%
壮年非大卒女性	57	383	86	8	12	188	14	2	3	753
	7.60%	50.90%	11.40%	1.10%	1.60%	25.00%	1.90%	0.30%	0.40%	100.00%
壮年大卒男性	3	97	44	114	4	119	10	0	2	393
	0.80%	24.70%	11.20%	29.00%	1.00%	30.30%	2.50%	0.00%	0.50%	100.00%
壮年大卒女性	6	89	34	10	11	290	38	1	1	480
	1.30%	18.50%	7.10%	2.10%	2.30%	60.40%	7.90%	0.20%	0.20%	100.00%
合計	122	1176	440	309	47	923	110	3	13	3143
	3.90%	37.40%	14.00%	9.80%	1.50%	29.40%	3.50%	0.10%	0.40%	100.00%
Chi-sq =1170.905, d.f.=56 Sig.<.01. Cramer'V=.231.										

４．プラチナ８と社会的態度の関係

次に、社会的態度項目および社会的活動項目とプラチナ 8 の関係をみていこう。社会的態度項目は、SSM2015 では主に留置票におかれている。いずれも肯定―否定、賛成―反対などの連続的な尺度を回答選択肢としている。ほとんどのものは 5 件尺度だが、4～11 件までスケールのかたちは多様である。

他方、「○○を、どの程度行いますか」という質問に対して、「よくする」～「まったくし

ない」などのように活動頻度を回答してもらうものは、社会的活動項目と呼ばれるが、これも留置票に数多く置かれている。多くの場合、5 件尺度で頻度の高―低を問う選択肢設計となっている。

さらに、職場適応、社会参加の積極性、投票参加、現代的消費活動、文化的活動などについては、類似の項目により質問項目バッテリーが複数用意されている。これらについては、設計に従って、3～5 変数による主成分得点変数にとりまとめた（補遺参照）。

ここでは分析結果について、傾向を了解しやすく、かつ比較しやすいようにするために、すべての指標を平均値 50.0、標準偏差 10.0 の偏差値得点に変換して示している。具体的に結果表示の例をみよう。表 14 に示した主観的ウェルビーイングの場合、階層帰属、満足度、幸福感、希望という 4 つの指標で構成されている。表の上段には 8 セグメントごとのゼロ次得点、すなわち社会の表面に表れているそのトピックの状態が示されている。他方、表の下段には８つのセグメントすべてについて、世帯年収(等価所得対数値)、職業(威信スコア)が平均値で、政令指定都市に在住し、配偶者がいるという同一の条件に揃えた場合の、推定平均値を示している。さらに、相互に相関の高くない 4 つの指標の上記 2 種の得点をレーダーチャートに表し、各セグメントの主観的ウェルビーイングの高低を視覚化できるようにしたものが図 2 である。図 2 には８枚の四角形のレーダーチャートが示されている。指標の方向は、肯定的あるいは積極的であれば大きく、否定的あるいは消極的であれば小さくなるように揃えてあるため、上層を自認し、生活に満足し、幸福で、絶望を感じていないほど、グラフの面積が大きくなり、下層を自認し、不満、不幸、絶望を感じているほどグラフの面積が小さくなる。コントロール時の推定平均は、鎖線のグラフによって示している。面グラフ、および鎖線グラフの大きさとかたちによって、実態としての社会意識のかたちをみることができる。各グラフの右下には、総合得点(4 指標のゼロ次得点の算術平均)を示している。要するにこれは、塾や予備校などの学力テストの成績について、各科目の偏差値得点や総合成績をみるのと同じやり方である。

表 14 および図 2 からは、主観的ウェルビーイングの学歴分断を確認できる。多くの示唆があるが、例えば、古市憲寿(2011)らのいう「幸福な若者論」という単純な説明は成り立たず、若年非大卒男性の主観的ウェルビーイングは極めて低い反面、若年大卒女性の主観的ウェルビーイングは高いということがわかる。主観的ウェルビーイングの最新の動向については、因果分析を主軸として、数土直紀ら(数土直紀編 1018)が解析結果をまとめているが、SSM2015 の解析結果もこれと大きく異なるものではない。

表 15 および図 3 は、ヘルスコンシャスをみたものである。ヘルスコンシャスの学歴分断を確認できる。指標となっているのは、健康に気を付けた食事に心がけているかどうか、運動をしているかどうか、喫煙傾向、飲酒傾向の 4 つである。ここでは非大卒男性の健康管理に課題があることが浮き彫りになっている。

表 14　セグメント別主観的ウェルビーイング得点

ゼロ次	上－下	満足－不満	幸福－不幸	希望－絶望	総合
若年非大卒男性	45.70	48.00	47.52	48.28	47.38
若年非大卒女性	47.64	49.98	50.63	48.24	49.12
若年大卒男性	51.95	51.56	50.53	49.36	50.85
若年大卒女性	51.89	52.58	52.99	49.37	51.71
壮年非大卒男性	48.30	47.68	47.56	51.40	48.74
壮年非大卒女性	49.23	49.71	49.59	50.01	49.64
壮年大卒男性	53.08	50.24	50.35	51.05	51.18
壮年大卒女性	53.03	51.27	51.60	51.37	51.82
合計	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00
η ^2	0.059**	0.024**	0.029**	0.014**	
ケース数	4497	4660	4530	4581	

コントロール後	上－下	満足－不満	幸福－不幸	希望－絶望	総合
若年非大卒男性	49.83	50.40	53.77	49.15	50.79
若年非大卒女性	49.95	51.70	53.48	52.39	51.88
若年大卒男性	53.18	54.83	55.44	49.98	53.36
若年大卒女性	52.47	53.16	56.31	52.73	53.67
壮年非大卒男性	49.05	50.11	51.61	51.63	50.60
壮年非大卒女性	50.83	51.53	52.04	50.83	51.31
壮年大卒男性	51.34	48.63	49.98	50.39	50.08
壮年大卒女性	53.27	50.96	52.34	51.26	51.96
Adj. R^2	0.187**	0.109**	0.152**	0.036**	
ケース数	3122	3205	3127	3163	

表 15　セグメント別ヘルスコンシャス得点

ゼロ次	食事に気をつける	運動する	喫煙しない	飲酒しない	総合
若年非大卒男性	45.50	50.16	44.06	47.66	46.84
若年非大卒女性	49.46	48.13	50.65	52.74	50.24
若年大卒男性	47.64	50.89	49.07	49.11	49.18
若年大卒女性	51.47	49.10	54.49	53.23	52.07
壮年非大卒男性	47.90	49.17	45.35	45.53	46.99
壮年非大卒女性	51.50	49.51	52.04	52.22	51.32
壮年大卒男性	50.72	53.15	48.29	44.78	49.23
壮年大卒女性	53.84	50.97	54.36	53.14	53.08
合計	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00
η ^2	0.058**	0.019**	0.125**	0.108**	
ケース数	4586	4585	4583	4585	

コントロール後	食事に気をつける	運動する	喫煙しない	飲酒しない	総合
若年非大卒男性	47.21	51.68	45.06	44.64	47.15
若年非大卒女性	50.61	48.20	52.17	54.03	51.25
若年大卒男性	48.99	51.22	47.39	44.88	48.12
若年大卒女性	52.47	48.73	55.21	54.09	52.63
壮年非大卒男性	48.31	49.25	44.93	44.05	46.63
壮年非大卒女性	52.65	50.53	53.68	51.87	52.18
壮年大卒男性	50.04	52.36	47.27	44.44	48.53
壮年大卒女性	54.31	50.19	54.59	53.41	53.13
Adj. R^2	0.075**	0.035**	0.155**	0.138**	
ケース数	3165	3164	3162	3164	

表 16 および図 4 は、保守的価値志向を取りまとめたものである。ここでは権威主義的態度については、3 項目の主成分得点変数を用いている。性別役割分業の指標は、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」という意見への賛否、同性愛不寛容は「同性同士が愛し合ってもよい」と思うかどうか、高学歴志向は「子どもにはできるだけ高い学歴をつけさせたほうがよい」と思うかどうかである。価値志向には極めて明瞭なセグメント間の分断がみられるわけではないが、男女の違いや、グラフの形状の違い、すなわち価値志向のパターンのセグメント間の細かい異なりを確認することができる。

最後に、表 17 および図 5 は、活動の積極性を主成分としてとりまとめ、職場適応、社会参加、投票参加、現代的消費、文化的活動についてみたものである。一見してわかるとおり、

セグメント間で活動のタイプと積極性の強弱に著しい異なりを確認することができる。特に強調すべきことは、壮年大卒男女の向社会的な活動の積極性と、若年非大卒男女の著しい消極性である。

表 16　セグメント別保守的価値志向得点

ゼロ次	権威主義	性別役割分業	同性愛不寛容	高学歴志向	総合
若年非大卒男性	51.63	51.63	50.65	46.61	50.13
若年非大卒女性	51.00	49.73	46.39	46.06	48.29
若年大卒男性	49.79	50.10	49.20	52.43	50.38
若年大卒女性	49.57	49.28	44.82	51.12	48.70
壮年非大卒男性	50.79	50.44	53.99	49.67	51.22
壮年非大卒女性	50.22	49.25	51.20	48.01	49.67
壮年大卒男性	48.29	52.34	53.44	54.81	52.22
壮年大卒女性	48.54	48.28	48.61	52.96	49.60
合計	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00
η ^2	0.011**	0.140**	0.088**	0.080**	0.022**
ケース数	4319	4443	4347	4377	
コントロール後	権威主義	性別役割分業	同性愛不寛容	高学歴志向	総合
若年非大卒男性	49.84	53.86	49.08	47.6	50.1
若年非大卒女性	50.75	51.42	46.38	49.0	49.4
若年大卒男性	47.14	48.48	48.34	52.3	49.1
若年大卒女性	48.30	48.86	45.92	50.6	48.4
壮年非大卒男性	50.85	51.87	53.37	51.1	51.8
壮年非大卒女性	49.59	50.29	49.67	50.8	50.1
壮年大卒男性	45.84	52.39	51.84	54.0	51.0
壮年大卒女性	49.39	49.57	47.74	53.3	50.0
Adj. R^2	0.008**	0.015**	0.080**	0.083**	
ケース数	3016	3082	3014	3045	

表 17　セグメント別社会的活動積極性得点

ゼロ次	職場適応	社会参加	投票参加	現代的消費	文化的活動	総合
若年非大卒男性	48.53	48.70	46.37	46.35	45.56	47.10
若年非大卒女性	48.94	47.49	44.50	50.96	47.13	47.80
若年大卒男性	50.20	47.84	50.41	50.74	52.38	50.31
若年大卒女性	49.99	47.51	49.35	53.63	55.33	51.16
壮年非大卒男性	51.04	51.13	50.61	45.72	45.85	48.87
壮年非大卒女性	48.59	50.67	50.12	49.10	47.87	49.27
壮年大卒男性	52.97	52.42	54.35	51.11	52.30	52.63
壮年大卒女性	49.68	52.45	53.44	53.84	56.14	53.11
合計	50.00	50.00	50.00	50.00	50.00	
η ^2	0.036	0.083	0.077	0.154	0.058	
ケース数	3825	4573	4582	4580	4564	
コントロール後	職場適応	社会参加	投票参加	現代的消費	文化的活動	総合
若年非大卒男性	48.48	49.84	46.36	46.48	45.55	47.34
若年非大卒女性	48.96	50.75	44.61	50.97	47.14	48.49
若年大卒男性	50.27	47.14	50.35	50.85	52.27	50.18
若年大卒女性	50.05	48.30	49.42	53.64	55.38	51.36
壮年非大卒男性	51.12	50.85	50.65	45.72	45.90	48.85
壮年非大卒女性	48.53	49.59	50.19	49.04	47.83	49.03
壮年大卒男性	53.02	45.84	54.40	50.98	52.41	51.33
壮年大卒女性	49.57	49.39	53.35	53.81	56.11	52.45
Adj. R^2	0.05	0.01	0.11	0.15	0.18	
ケース数	2630	3016	3160	3160	3148	

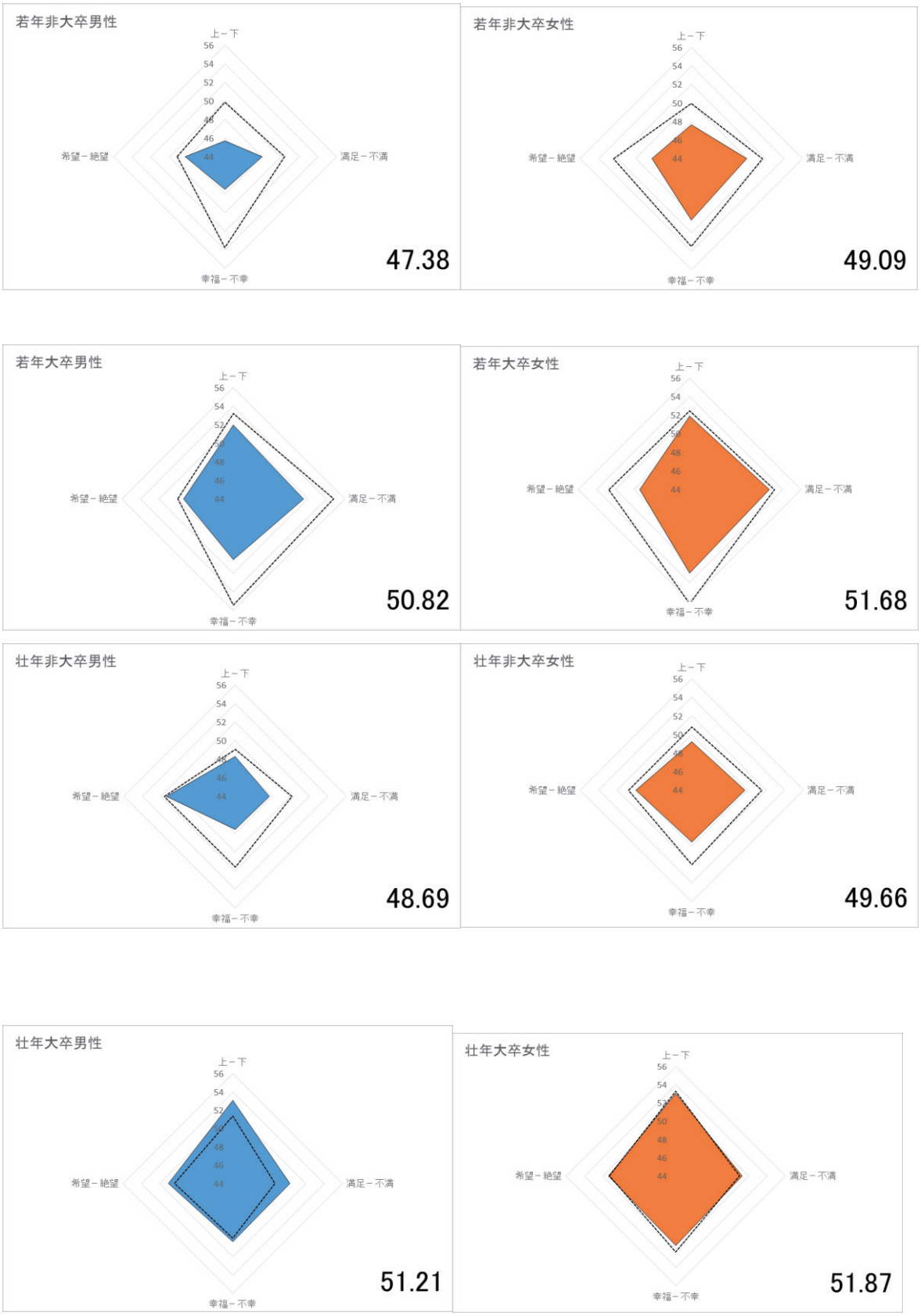

図 2　セグメント別主観的ウェルビーイング得点レーダーチャート

図 3　セグメント別ヘルスコンシャス得点レーダーチャート

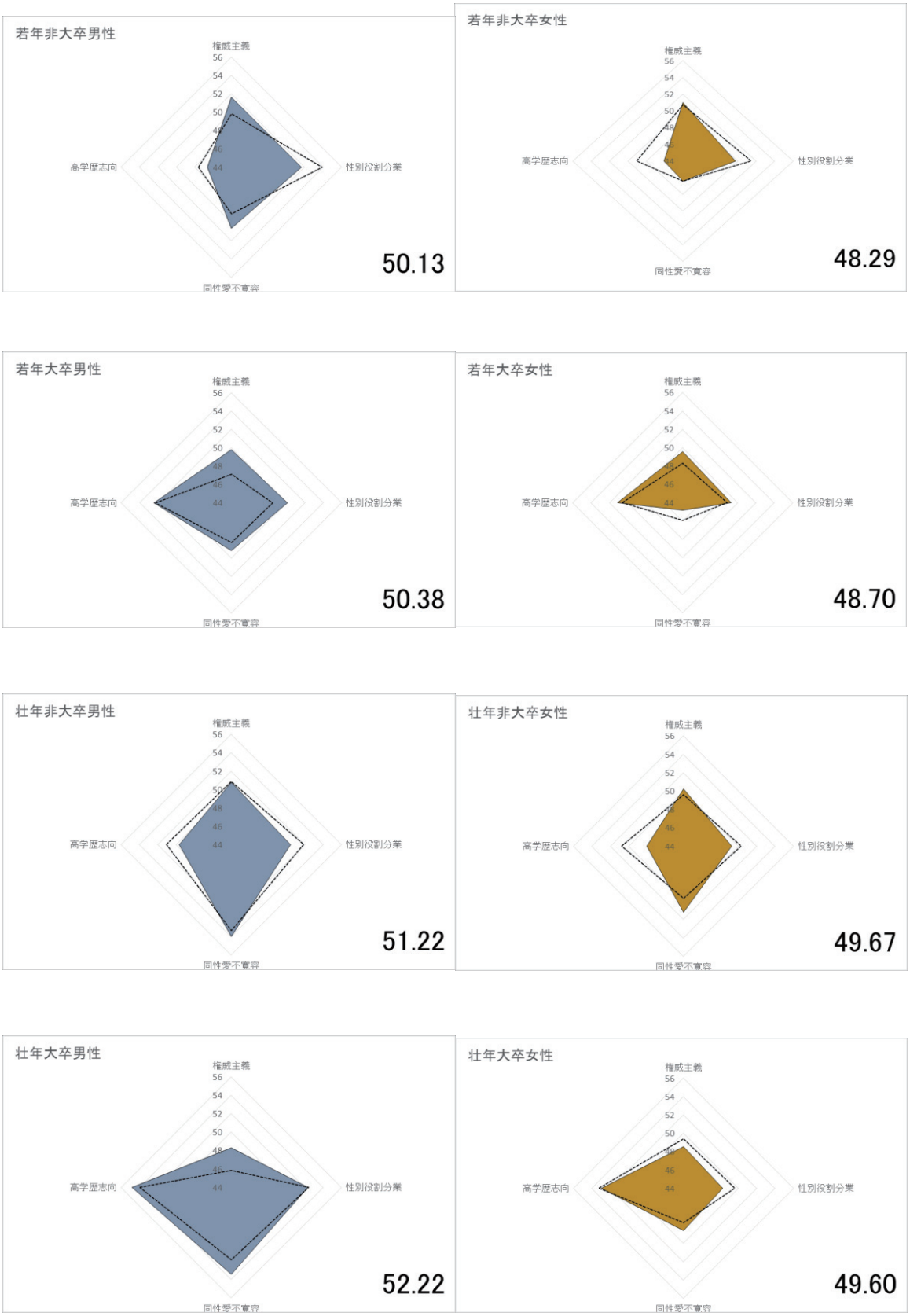

図４　セグメント別保守的価値志向得点レーダーチャート

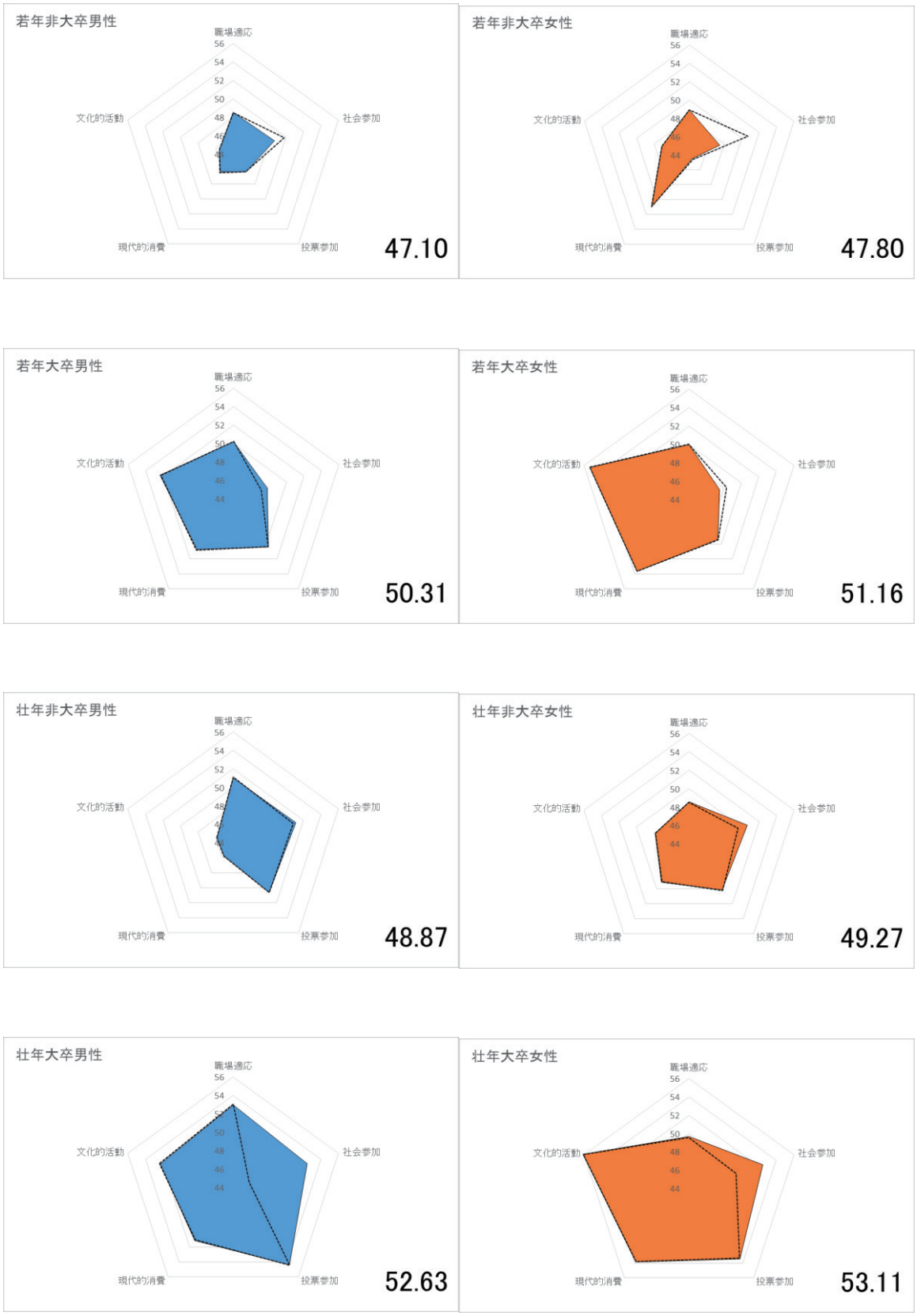

図５　セグメント別社会的活動積極性得点レーダーチャート

５．結語

本稿では、分析の視野を現役世代に絞りジェンダー (男/女)、年齢 (若年/壮年)、学歴分断線 (非大卒/大卒)という 3 本の分断線を用い、この現役世代の対象者を 8 つの社会集団に分けることを提案し、アイデンティティ・セグメンテーションのプラチナ 8 という変数を紹介した。そしてこれに基づいて社会的属性の異なりを示し、社会意識や社会的活動の分断状況を検討した。その結果、現代日本社会の現役世代の SES、家族形態、社会的活動及び社会的態度の分断状況が示唆され、プラチナ 8 の有用性が示された。

今後の課題としてはこの変数を社会意識論型回帰モデル(吉川 2014)に組み込んで、アイデンティティの格差を明らかにするということなどがある。本稿ではひとまず基礎的な記述にとどまっているので、これはまた別稿において検討する機会をもちたい。

[補遺]

補遺表1　権威主義の尺度構成(主成分分析)

質問項目	抽出後の共通性	第1因子負荷量
権威のある人々にはつねに敬意をはらわなければならない	0.701	0.491
以前からなされてきたやり方を守る	0.794	0.631
指導者や専門家にたよる	0.749	0.561
違った考えかたをもった人がたくさんいる方が望ましい	−0.252	0.063

因子抽出法: 主成分分析

補遺表1　権威主義の尺度構成(主成分分析)続き

	固有値	分散の %	累積 %	合計	累積 %
第1因子	1.746	43.66	43.66	1.75	43.66
第2因子	0.982	24.55	68.20		
第3因子	0.702	17.54	85.74		
第4因子	0.570	14.26	100.00		

補遺表2　職場適応の尺度構成(主成分分析)

質問項目	抽出後の共通性	第1因子負荷量
自分の仕事の内容やペースを自分で決めることができる	0.814	0.662
仕事のやり方に自分の意見を反映させることができる	0.821	0.673
現在の仕事の内容に満足している	0.606	0.367

因子抽出法: 主成分分析

補遺表2　職場適応の尺度構成(主成分分析)続き

	固有値	分散の %	累積 %	合計	累積 %
第1因子	1.702	56.75	56.75	1.70	56.75
第2因子	0.807	26.90	83.65		
第3因子	0.490	16.347	100.000		

補遺表3　社会参加の尺度構成(主成分分析)

質問項目	抽出後の共通性	第1因子負荷量
市民運動への参加頻度	0.579	0.761
ボランティア活動への参加頻度	0.636	0.797
自治会・町内会活動への参加頻度	0.472	0.687

因子抽出法: 主成分分析

補遺表3　社会参加の尺度構成(主成分分析)続き

	固有値	分散の %	累積 %	合計	累積 %
第1因子	1.686	56.22	56.22	1.69	56.22
第2因子	0.742	24.73	80.95		
第3因子	0.572	19.053	100.000		

補遺表4　現代的消費の尺度構成(主成分分析)

質問項目	抽出後の共通性	第1因子負荷量
ｸﾚｼﾞｯﾄｶｰﾄﾞで買い物をする頻度	0.641	0.801
ｲﾝﾀｰﾈｯﾄで買い物やﾁｹｯﾄ予約をする頻度	0.684	0.827
通信販売のｶﾀﾛｸﾞで買い物をする頻度	0.396	0.629

因子抽出法: 主成分分析

補遺表4　現代的消費の尺度構成(主成分分析)続き

	固有値	分散の %	累積 %	合計	累積 %
第1因子	1.722	57.40	57.40	1.72	57.40
第2因子	0.788	26.28	83.67		
第4因子	0.490	16.33	100.00		

補遺表5　文化的活動の尺度構成(主成分分析)

質問項目	抽出後の共通性	第1因子負荷量
ｸﾗｼｯｸ音楽のｺﾝｻｰﾄへ行く	0.365	0.604
美術館や博物館に行く	0.610	0.781
図書館に行く	0.561	0.749
小説や歴史などの本を読む	0.567	0.753

因子抽出法: 主成分分析

補遺表5　文化的活動の尺度構成(主成分分析)続き

	固有値	分散の %	累積 %	合計	累積 %
第1因子	2.103	52.58	52.58	2.10	52.58
第2因子	0.846	21.15	73.73		
第3因子	0.544	13.61	87.34		
第4因子	0.507	12.66	100.00		

［文献］

古市憲寿．2011.『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.

原純輔・今田高俊．1979．「地位の非一貫性」富永健一編『日本の階層構造』.
吉川徹．2009．『学歴分断社会』ちくま新書.
吉川徹．2014．『現代日本の「社会の心」：計量社会意識論』有斐閣.
吉川徹．2018．『書名未定』光文社新書.
佐藤俊樹．2000．『不平等社会日本』中公新書.
数土直紀編．2018．『格差社会のなかの自己イメージ』勁草書房.
筒井淳也．2016．『結婚と家族のこれから』光文社新書.

A Study about Segmentation in the Working Generation

Toru Kikkawa
(Osaka University)

Abstract

The purpose of this study is to grasp general subjective as well as socio-economic tendencies of working generation in contemporary Japan. I select men and women aged 20 to 59 years old. The target population size is about 60,250,000 persons. The valid cases in SSM 2015 are 4,620. The design aims to examine working-generation men and women who currently engage to their occupational life, marital life, child bearing, educational investment, and so on. I use gender (male/female), cohorts (20-30s and 40-50s), and education (tertiary education graduate/non-graduate) to divide the population into eight segments. Then I analyze the differences in social attribution, stoical attitudes, and social activities among the segments. The outcomes show the relevance of simple segmentation in contemporary Japanese stratification studies.

Keywords: divided society, the working generation, tertiary education graduates